

主 題：信仰の自己診断 4 =人生の真価=

聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章10-17節

先に(10/14)、私たちはこのIコリント3:1から「霊的幼子」について学びました。年数は経っているけれどまだ信仰において幼い人たち、信仰において余り成長していない人たちのその特徴を見て来ました。恐らく、その学びを通して、ある人は「これは自分のことが語られている」とそのように思われたかもしれません。その方に聞いてみたいのですが、そのときあなたは「これではいけない、何とか成長したい!」とそのように思われたでしょうか?そのような思いをお持ちになったことと私は信じます。今日、私たちが見ていく3:10からは、どうすれば私たちは成長していくかをパウロが教えています。確かに、みな幼子です。そこから私たちは成長していくのであって、どうすれば私たちは信仰において成長していくのか、そのことを見るのです。まず、パウロは「信仰者としての責任」について話します。そして、その後で「信仰者としてどのように生きるのか」と生き方について教えます。その後は、「神のさばきと神の警告」が続きます。順に見ていきましょう。

A. 信仰者としての責任 10節

1. リーダーたちの責任

1) パウロ : 10 a節「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。

…」、

「私は」とパウロは自分自身のことを話しています。教会の霊的なリーダーとして彼自身の責任について話をするのです。何をしたのか?「賢い建築家のように、土台を据えました。」とあります。パウロは神の導きに従っていろんな所に出て行って福音宣教を為します。救いのメッセージを語ったのです。そして、救いに与った人たちに神の真理を教え、その信仰にしっかり立って生きていくようにとその土台を据えたのです。当然、正しい教理を教えたでしょう。そのことによっていろんな間違った教えが入って来ても彼らはそれらに惑わされることはありません。大変重要なことです。パウロはこのような働きをするのですが、「賢い建築家のように」と「賢い」ということばを使っています。これは「熟練した、老練な」という意味があります。ちょうど、建築家が知恵を働かせながらデザインをし建てていくように、パウロは知恵を働かせながら、それは彼自身の知恵ではなくて神の知恵をもってこのすばらしい神のメッセージを語り続けたこと、そのことを教えるのです。

実際に、Iコリント9:19からこのように語っています。「:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。:20 ユダヤ人にはユダヤ人となりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者となりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。:21 律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者となりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。:22 弱い人々には、弱い者となりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」、人々を見て、そして、その人たちに分かるように神の真理を語ったのです。パウロについて詳しい説明は必要ではありません。大変すばらしい信仰者、神に仕えた偉大な信仰者であるということは説明するまでもありません。

見ていただきたいのは「与えられた神の恵みによって、」ということばです。確かに、パウロはすばらしい働きをして来ました。様々な所で彼は教会の土台を築いていきました。つまり、それは神の恵みによって信じる人たちが起こり、そして、その人たちを訓練していったということです。このすばらしいパウロの働きですが、パウロはそれが自分の功績であるとは教えていません。「与えられた神の恵みによって」と彼が教えたいことは自分の働きはすべて神のみわざである、誉められるのは自分ではなくて神なのだということを明確に記すのです。実際に、Iコリント15:10でこのように語っています。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と。パウロという偉大な信仰者を見るときに、なぜ、彼が偉大であったのかと言うと、彼は「神の恵みに依存して生きた」ということです。生まれつきに彼が立派だった、彼はいろいろな教育を受けた、だから、彼はこんな偉大な宣教者、信仰者になったのか?そうではないということです。皆さん、このみことばが私たちに教えてくれることは、あなたも私もこのすばらしい神によって用いていただくことができるということです。パウロが私たちに教えることは、彼は神の力によって神から与えられ

た働きをしたということです。

どのような働きであっても、私たちが忘れてはならないのは自分の知恵と力によって為すのではなく、すべて神の力、神の恵みによって為すということです。そのときに神が働いてくださる、そのときに神が喜んでくださる、そして、そのときに神のみこころが成されるのです。自分ができることをするのではなく、神が命じたことをするのです。どちらかという、私たちは神が命じたことでも「できるかできないか」を自分で判断してしますが、それは信仰ではないのです。信仰というのは神が「しなさい」と言われたことをすることです。そして感謝なことに、それができるように神は力を備えてくださる、それを「恵み」と言っているのです。

ですから、だれ一人として神の命令に従えないという人はいないのです。救いによって従うことが可能になったのです。パウロが教えていることは、彼は神の恵みによって神が召してくださったこと、そして、神が命じたそのみこころに従って生きたということです。だから、これが「信仰生活のカギ」だと言えませんか？ 私たちはみことばを通して神のみこころを知ったときに、神が「このように生きなさい」と言われたなら、私たちの応答は「神さま、分かりました。そうします。あなたの助けによってそれを実践します。」です。パウロはそのように生きたのです。

2) 他のリーダーたち : 10b節「…そして、ほかの人がその上に家を建てています。」、パウロは土台を据える働きをしました。そして、その上に別のリーダーたちが家を建てていると言います。確かに、パウロの宣教を見る時に、コリントとエペソを除くほとんどの場所においてはパウロは短期間しか滞在できませんでした。このコリントの町は大体1年半、エペソは3年間滞在しましたが、それ以外の所は大変短かったのです。彼は出て行ってキリストの福音を語り、信仰を持った人たちに神の真理を教え彼らを訓練するのです。でも、その後、彼は次の所に移動しなければならなかったため、神は別の人たちを送ってその人たちを使って教会を建て上げていったのです。このコリントの教会を考えたときに、アポロという人物が神によって用いられたことが記されています。3:6「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」と。

パウロは種蒔きをしたのです。その後、水を注いでくれたのはアポロです。神の働きというのはチームワークだと思いませんか？神はいろいろな人たちを使って神のみわざを為されるのです。皆さんが救いに与ったのもそうでしょうか？だれかが福音を語ってくれた、そして、その後、皆さんを助けてくれたのは、必ずしもその種を蒔いた人でないかもしれません。そのように、いろいろな人たちによって私たちが成長して来たように、パウロは教会を建て上げ、そして、その教会を彼以外の人々が成長させてくれたのです。パウロであろうとアポロであろうと、彼らに共通していたことは、彼らは「聖書を教えた」ということです。

アポロという人物に関しては使徒の働き18章に書かれています。彼もパウロと同じようにユダヤ人でした。18:24-28「:24 さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。:25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。:26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。:27 そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、そこの弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。:28 彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。」。彼らに共通していたことは、神のおことばを妥協しないでその通り正確に伝えたということです。その責任は今も変わっていません。こうして皆さんの前で話をする私たちもしかり、日曜学校の教師もしかり、みことばを取り次ぐ者たちすべてに共通している者の責任は、神のことばを絶対に曲げずに正しく語るということです。

なぜ、それが必要か？みことばによって成長するからです。みことばを通して私たちは神のみこころを知るからです。私たちの使命は神のことばをその通り語ることです。人々が聞きたいメッセージをするのではなく、人々が聞かなければいけないメッセージをするのです。それはこのみことばに記されているメッセージです。

さて、こうしてパウロは彼自身、また、彼以外のリーダーたちの責任について話しました。みことばをもって土台を築き、みことばをもって建て上げていきました。でも、それだけではありません。

2. 各人の責任 10c節

10c節「…しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。」、「それぞれが」とあります。「一人ひとり」がということです。リーダーたちの責任から、次は「一人ひとり、各人、クリスチャン一人ひとり」の責任へと話が展開していきます。みことばを取り次ぐ者たちは神のこ

とばを正確に語ります。そして、そのみことばを聞いた者たちの責任は、そのみことばを実践していくことです。みことばの教えに従うのはその教えが神の教えだからです。パウロは各信仰者はどのような信仰生活を生きるかにおいて責任があると言います。あなたが信仰者としてどのように生きていくのかということです。それはあなたの責任だと言うのです。私たちはそれをだれかのせいにはできません。一人ひとりの責任です。それでパウロはこの後11節から信仰者としての生き方について話をするのです。

B. 信仰者としての生き方 11-12節

1. 土台はイエス・キリスト 11節

11節「というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」、新しい生き方はすべてイエス・キリストを土台に据えるところから始まるのです。つまり、「救い」から始まるのです。イエス・キリストを信じて生まれ変わることで、その瞬間から新しい人生が始まるのです。ですから、イエス・キリストを信じた皆さん、神によって救われた皆さんはみな共通してこのように言えます。「私はイエス・キリストを土台に据えたのです」と。そこがスタートラインです。

もしかすると、あなたは「イエスとはだれですか？」と質問を受けるとき、多くの人たちと同じように「イエスさまはキリスト教を始めた教祖だ」などと、いろいろなところから得た知識だけを口にしていたかもしれません。でも、イエス・キリストを信じた瞬間に、私たちは「イエスさまとはこの世に人として来られた救い主であり、人となられた神であり、私の罪を負って十字架で死んでくださりよみがえられた唯一真の救い主です。彼は私の救い主、私の神、私の主です。」と、そのように告白するはずで、イエス・キリストはあなたと個人的な関係に入ってくださった「私の主、私の神」なのです。

ですから、パウロは人々がこのイエス・キリストという土台をしっかりと据えるためにイエス・キリストを宣べ伝えたのです。Iコリント1:23で「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、」と言っています。2:2では「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。」と言っています。

パウロが出て行って語ったのはイエスのことです。イエスがいったいだれなのか？イエスが何をしてくださったのか？イエスは何を為さっておられたのか？パウロやほかのリーダーたちは、ただ、イエス・キリストの十字架と復活だけを語ったのではありません。使徒20:27を見てください。「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」、また、コロサイ1:25でも「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。」と語っています。ある所では「キリストを宣べ伝える」のです。ある所では「神のご計画全体を」、また、「神のことばを余すところなく」伝えると言います。これらは別のことでしょうか？そうではありません。

皆さん、私たちが手にしているこの旧約聖書も新約聖書も、この66巻すべてのテーマは「イエス・キリスト」です。この聖書が私たちに教えてくれるのは「イエス・キリスト」です。だから、パウロはこのみことばを語ったのです。もし、イエスの十字架と復活だけで済むのなら、こんな分厚い聖書は必要としません。これは神があなたに何を望んでいるのか、神とはどんなお方なのか、どんなに知恵があり、どんなにあわれみに富んだお方か、どんなに聖い方であり、どんなにすばらしいお方なのか、そのことを私たちに教えてくれるのです。ですからまず、私たちはこのみことばによって、このすばらしいイエス・キリストというお方を私の人生の土台に据えるのです。救いに与ると言うことです。

2. 具体的な歩み 12-15節

救いに与ってそこから新しい歩みが始まるのですが、実際にどのように生きていくのか？12節「:12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、:13 各人の働きは明瞭になります。」と、「キリスト」という土台を据えた者たち、救われた者たちを大きく二つのグループに分けています。あるグループは「金、銀、宝石」でその土台の上に家を建てる人、片方はイエス・キリストの土台の上に「木、草、わらなど」で家を建てるグループです。この二つのグループに信仰者を分けているのです。何を言わんとしているのでしょうか？「金、銀、宝石」で家を建てる人はイエス・キリストという土台にふさわしい歩みをしている人たち、「木、草、わらなど」で家を建てる人はこの土台にふさわしくない歩みをしている人たちです。そのことを説明していきます。

1) **金、銀、宝石で家を建てる人** : イエス・キリストに見合ったふさわしい歩みをしている人ですが、今から五つのことを見ていきます。これら五つのことを実践している人たちは確かにここにあるように「金、銀、宝石」で家を建てている人です。そのように生きている人です。この五つのことを見

て、自分がそのようにしているかどうかを考えてみてください。それをしているなら、あなたはイエス・キリストの土台の上に「金、銀、宝石」で自分の人生を建てていると言えます。でも、そうでなかったら、自分の人生を吟味して、もしかすると「木、草、わら」かもしれない。それは「金、宝、宝石」で建てるのがどういうことかを見れば、自ずから「木、草、わら」で建てるのがどういうことかが分かるからです。「金、銀、宝石」で自分の家を建てている人とは？

(1) 主のみことばを實踐している人 : 聖書のみことばを實踐している人が「金、銀、宝石」で自分の家を建てている人だと言えます。皆さんは神が私たちに望んでおられることはもう十分にお分かりでしょう。イエスが山上の説教でこのようなメッセージをお語りになったことを憶えておられますか？マタイ7:24、25「:24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。:25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。」「岩の上に建てた人」とは？「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者」です。つまり、こうして私たちは、例えばこの礼拝の時間に神のおことばを聞き、神のみこころを知ったとき、聞いたあなたには責任があるということです。これはもう何度も学んで来ました。そのみこころに従うかどうかという責任です。そして、そのみこころに従う者こそが「金、銀、宝石」で建てている人だとみことばは教えるのです。

ヤコブのみことばを思い出されるかもしれません。ヤコブは「みことばの實踐」についてこのように言います。ヤコブ1:22、25「:22 また、みことばを實行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。…:25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。」と。忘れないために一心に見つめ続けるのです。神が何を言われたのかを覚えている人は実行します。私たちの大きな問題の一つは神が何を言われたのかを忘れてしまうことです。それでは実行することなどできません。実行したいと思っている人たちは、神が何を望んでおられるのかを忘れないでしっかり覚えようとしします。ですから、「こういう人は、その行いによって祝福されます。」とある通り、行ったゆえに祝福されるのです。

(2) 主に仕えている人 : あなたが救いに与ったときに、神は確かに罪の赦しをくださった。永遠のいのちを与えてくださった。でも同時に、あなたに靈的な賜物が与えられたことをご存じですね。生まれ持っている才能ではありません。信仰に与ったときに神がくださるものです。教える賜物、もてなす賜物、様々な賜物が聖書の中に記されています。これらは生まれながらの才能のことではありません。なぜ、そのようなものが与えられたのでしょうか？みことばはこう言います。Iコリント12:7「しかし、みな益となるために、おのおのに御靈の現れが与えられているのです。」、また、Iペテロ4:10には「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」とあります。

こういうことです。神はあなたを救ってくださったときにあなたに特別な賜物をくださった。あなたに与えられた賜物はだれも持っていません。なぜ、その賜物があなたに与えられたのか？その賜物をあなたが用いることによってあなたが成長し、周りも成長するためです。パウロはローマ14:19で「そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの靈的成長に役立つことを追い求めましょう。」と言っています。つまり、神が私たちに求めていることは、自分自身が成長することだけでなく、周りのみなも靈的に成長するように助け合っていくということです。そのために神が与えてくださったのが「靈的な賜物」なのです。それをあなたが教会の中で用いることによって、あなたの信仰が成長するだけでなく、あなたの周りのみんなも成長するのです。神が私たちを救ってくださり、こうして一つの群れに集めてくださった。何を望んでおられるのか？一人ひとりが働き人としてその賜物を用いて働くことです。

主に対する奉仕においては決して「これでいいか…」と満足したくありません。神がくださった恵みはもう十分なのです。そう思いませんか？神の約束の通り、日々私たちの必要を満たしてくださり必要な時にちゃんとくださる。神の恵みは100%です。では、私たちの神に対する働きはどうでしょう？不完全であり不十分です。でも、そんな自分をどこかで良しとしているかもしれない。「これくらい神さまのために仕えていたらもうこれでいいでしょう…」と。一人ひとりが決めなければいけないことですが、願わくは、私たちはもっと主のために何かしていきたい。主が成してくださったこの救いのみわざに対してどう答えていくのかを考えると「これくらいいいでしょう…」などとは決して思わないでしょう。もし、あなたがそう思っているのなら、どうか、あなたの賜物を教会のために使ってください。与えられた賜物を使って教会に仕えていくのです。あなたは働き人なのです。あなたはお客さんではない。ここにあるように「金、銀、宝石」で家を建てている人たち、そのように生きている人たち

は自分に与えられた賜物を使って教会で仕えているのです。そういう人たちなのです。

(3) 罪を憎み、罪から離れている人 : パウロはⅠテサロニケ4 : 3で「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、」と教えました。言うまでもありません。神が聖い方だから私たちも聖くあること、それがみこころだと言います。ですから、罪から離れている人はまさに「金、銀、宝石」で建物を建てている人です。罪から離れるということは、この後4 : 4から記されていますが、少なくとも、まず言えることは「行い」においてです。主を知らない人たちと同じように不品行におぼれる、情欲におぼれるというようなことがないようにと言います。

同時に「ことば」においてもそうです。私たちは神が喜ばれることを為していくのですが、同時に、神がお喜びになることを語っていくのです。エペソ4 : 29に「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」と書かれています。信仰者の皆さん、私たちが注意しなければいけないことは、私たちが口にすることばは主がちゃんと聞いておられるということです。正確に言えば、口に出さなくても私たちの心の願いを神はちゃんと知っておられるということです。でも、私たちが口にすることばについて私たちが覚えなければいけないのは、私の口から出ることばがそれを聞いている人を喜ばせることができるかどうかです。それが私たちの責任なのです。もちろん、私たちは不完全です。罪を犯したならそれを告白しながら生きていきます。でも、この「金、銀、宝石」で建て上げている人たちは、罪から離れる人たち、それから離れようとしている人たちです。

みことばが教えることは、そのようにして聖められた者は神にとって有益な者になるということです。Ⅱテモテ2 : 20、21に「:20 大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。:21 ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」とある通りです。みことばはとてもクリアです。神が私たちに何を望んでおられるのか？そのことがこのように書かれています。

(4) 福音の望みを見失わない人 : コロサイ1 : 23に「ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」と書かれています。パウロは、あなたがたはどんなときでも希望を失ってはいけないと言っているのです。神が私たちに望んでおられること、また、パウロが望んだことは、私たちは信仰によっていただいた希望を絶対に忘れないということです。どのような希望をいただいたのか？皆さん、どんな希望を持って生きていますか？まず、イエスが私たちを迎えに来てくださるという希望でしょう。今日、イエスが帰って来てくださるかもしれない。私たちはイエスのその「再臨」を待っているのです。そのように約束されたからです。

私たちが生きている間にその「再臨」に出会うことがなかったとしても、それまでに肉体の死を経験したとしても、行く所はもう決まっています。神とともに永遠を過ごすのです。その希望を私たちは持っているのです。その希望を見失わないことです。いろんなことがあっても「金、銀、宝石」で家を建てている人たちはその希望に立つのです。苦しいこと辛いことがあっても、主が与えてくださった約束、希望をもって生きるのです。これは永遠に続くものではありません。しかも、いろんな困難や苦しみも実は神が愛するゆえにあなたに与えてくれたのです。そして、イエスが帰って来てくださる。その時にすべてのことが終わるのです。希望を持って生きている人たちです。

(5) 神への愛からすべてのことを行っている人 : すべての行ないの動機が神への愛、そのように歩んでいる人です。ルカの福音書11章にパリサイ人とイエスが話しているところがあります。イエスの厳しいことばから始まっています。ルカ11 : 42「だが、わざわざい。パリサイ人。おまえたちは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神への愛はなおざりにしています。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もなおざりにしてはいけません。」、彼らがこのようにささげ物をしていることをイエスは責めていません。彼らがしていることは行為だけを見るならそれは間違っていなかったからです。

では、何が間違っていたのか？その動機です。「公義と神への愛はなおざりにしています」とあります。私たちもこうして教会に集まったり奉仕をしたりなど、いろんなことをしていますが、問題はそれを神への愛を動機として、神を愛するから行っているかどうかです。毎日の生活においても、あなたの為すことすべてが神を愛するゆえに為しているのかどうか、それがすべての動機となっているのかどうかです。イエスがここでパリサイ人を責めたのは、やっていることは正しかったけれど心が正しくなかったからです。そのことを責めたのです。神の関心は何をするかではない、どんな「心」でしているのかで

す。神を愛するゆえにあなたはそれを為しているのかどうかです。

今見て来たこの生き方、まさに、このような歩みをしている人たちが、イエス・キリストという土台の上に「金、銀、宝石」で家を建てた人たちです。

2) 「木、草、わらなど」で家を建てた人たち : この人たちは今見て来たことをしていない人たちです。先ほどマタイの福音書7章の山上の説教のメッセージを見ましたが、その続き7:26-27をご覧ください。「:26 また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。:27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」と書かれています。

何が違うかお分かりになったでしょうか？神のことばを聞いてそれを行うかどうかです。皆さん、私たちは次のことを考えなければいけないのです。つまり、この土台の上に建物を建て上げていくということは一生かかっていることです。一生かけて自分の信仰生活を建て上げていくのです。土台である主イエスに見合った最高のもので自分は自分の信仰生活を建て上げているのかどうか？そのことを考えてみてください。主の前に正しいことを正しい動機で行っているのかどうかです。あなたの人生をすべてご存じである神があなたを見て喜んでおられるかどうかです。そのことを考えなければなりません。なぜなら、あなたにはどのように生きるかの責任があるからです。信仰者としてどのように生きていくのかという責任があるからです。

パウロは間違いなくすべての信仰者がこの「金、銀、宝石」で建てることを望んでいたということは言うまでもありません。なぜ、そのような生き方が大切なのか、その後を見てください。

C. 神のさばきと神の警告 13-17節

1. 神のさばき 13-15節

「真価が問われる日が来るから」とパウロは言います。13節「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」、つまり、パウロは責任のこと「このように生きるのですよ」と話した後、今度は神のさばきへと話を展開していくのです。

1) 何が起こるのか : 人生の真価が明らかにされる

「各人の働きは明瞭になります。」とあります。それが本当にそのままそっくり明らかにされるということです。

2) どのようにして? : 火によって

「その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」と、金属を精錬する時に用いられるのは「火」です。金属の純度を知るときにはその金属を溶かしてみれば良いのです。見かけはよく分からないけれど、溶かしたら不純物が全部上に上がって来るからです。あなたの人生の純度、神の前に価値ある人生を過ごしたのかどうか、それがこの「火」によって明らかにされる、その日が来るということです。人々はあなたの働きを見て誉めているかもしれない。あなた自身も他の人と比べて熱心だと思って安心しているかもしれない。でも、みことばが教えることは、このさばきの日が来たときに、神があなたをさばくということです。あなたの隠れた本当の姿が明らかにされるのです。

3) 二種類の結果 : 対比されています。「報いを受ける」のか、或いは「損害を受ける」のかです。14-15節「:14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。:15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」、

(1) 建物が残る : 14節では火によって精錬された後その建物は残ったとあります。それは、その人が神の前に価値ある生活を過ごしたからです。その人の人生は神に喜ばれていたからです。だからその人に「報いが与えられる」、神からの称賛が届くのです。マタイ24章、25章で繰り返して出て来る話は「忠実な賢いしもべ」のことです。24:45-46「主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。:46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。」。25章では5タラント、2タラント、1タラントを預かった者たちの話です。25:21「その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ。』」、どちらも主人が帰って来ます。その時に主人が喜ぶかどうか、主人が誉めてくれるかどうかです。良い忠実なしもべは主人がいつ帰って来てもいいように備えをしていたのですが、そうでないしもべは何もしていませんでした。

この建物が残った人は、いつ主人が帰って来てもいいように神のみことばに従い、神が教えておられるように与えられた賜物使いながら、罪から離れて、そして、いつもどんなときでも希望をしっかりと心に据えて、そして、神に従い続けたのです。その神への従順は神を愛するその愛に動機づけられたも

のでした。このような歩みをしている人たちは、主が帰って来られたときに「よくやった。わたしはあなたの歩みを喜んでいいます。」と言われるのです。価値ある人生を生きただけです。

(2) 建物が残らない : 15節「もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」、この人も助かるのです。なぜなら、この人もクリスチャンだからです。でも悲しいことに、建物は全部焼けてなくなるのです。神の前に価値ある生活をして来なかったからです。この「損害を受ける」ということばは「損失を被る」ということです。レオン・モリスは「賃金をもらい損ねるという意味がある」と言います。つまり、こういうことです。神のみことばに従って「金、銀、宝石」で建てた人たちは神の祝福をいただきますが、「木、草、わらなど」で建てた人たちはそれを逃してしまうということです。

信仰者の皆さん、あなたも私も分かっていることは、神だけが私たちの本当の幸せをくれるということです。世の中は私たちが惑わすために、幸せになるためにはこうしなければならない、これを手にしなければならない、このような経験をしなければならないなどと、いろいろな嘘をもって迫ります。私たちが聖書を通して教えられているのは、神だけが本当の幸せをくださるということです。この地上で何を持っていようと持っていまいと、私たちは神がくださった幸せをもって神のすばらしさを証しながら生きていくことができるのです。でも、そのすばらしい人生を自分自身が台無しにしてしまったのです。神が私たちを使うと言われているのに、私たちがその神の声に耳を傾けようとせず、自分勝手な選択をして歩むことによって、私たちはこのすばらしい祝福を逃してしまう、賃金をもらい損なうのです。この地上にあってもこの祝福をいただきながら生きることができるし、このさばきのときに神の祝福をもらって永遠を生きることができるのに、それを逃してしまうのです。

その人の人生は神の前に価値がない、無駄な人生を生きただけです。悲劇だと思いませんか？

2. 神の警告 16-17節

16-17節「:16 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。:17 もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」

1) 神の教会 : パウロはここで「神の教会」の説明をします。16節は「知らないのですか。」ということばで始まります。何を知らないのか？改めて彼が尋ねることは「あなたは神の神殿である、神の御霊があなたがたに宿っている」ということで、それを「あなたは知らないのか？」と問うのです。「神殿」という建物を思い出してください。なぜ、ほかの建物は神殿でなくこのエルサレムに存在していたのが神殿だったのか？あるものがそこに存在していたからです。それは「至聖所」です。神がそこに臨在される、その場所があったから他の建物とは違ったのです。そのことをパウロは言っているのです。あなたがたのうちには神がいるでしょう？と。面白いことは「あなたがたは」は複数で、「神の神殿」は単数なのです。神の神殿が複数に存在するわけではありません。

彼が言いたいことは、個人のこと、教会のことです。ここで語られている警告というのは、今、私たちが見て来たように神が何を望んでいるかそのことは明らかです。しかし悲しいことに、神のみわざが成されようとするときには必ず悪が働くということです。このコリント教会の中にも間違った教えを持ち込んで来る人、間違った生き方を持ち込んで来る人たちがいたのです。神の警告は、彼らに対して必ず「神のさばきがある」ということです。クリスチャンたちにそのさばきがあると言っているのではありません。そのようにして教会の中に入り込んで来て人々を惑わして正しくない教えに導いて行こうとする人たち、こういう偽りの教師たち、そういう人たちの存在はどこにでもあります。その人たちに対して神のさばきが来るということです。

神は「金、銀、宝石」で建てなさいと言われているのに、ある人たちは惑わされてしまって「木、草、わらなど」で建てること満足するかもしれない。そのようなことを教える偽りの教師たちはこの神のさばきを受けると警告するのです。なぜなら、神の神殿は聖なるものであり、そして、あなたがたがその神殿だと言います。神の目に教会というのは尊いものです。神の目にあなたは尊いものです。その人たちを惑わして、そして、偽りの方向に引っ張って行こうとする人たちに対する警告なのです。

今日、私たちが見て来たこと。教会の中にいる霊的なリーダーたち、教師たちはしっかりと教会を神の真理で建て上げていくという責任があります。そして、救いに与った教会員はその神のみことばにその真理にしっかりと立ってそのみことばを實踐することによって、神の前に価値ある生活を生き続けること、それが「金、銀、宝石」の生き方だからです。信仰者の皆さん、人の評価ではなくて神の正しい評価の上に生きることです。神があなたの人生を正しく評価してくださる。その日が来ることをしっかりと心に刻んで今日を生きることです。その日は確実に迫っています。今日を無駄にはしてはいけません。

のです。これからの人生を無駄にしてはいけません。みことばに従うその決心をもって、神の助けをいただきながら「金、銀、宝石」で建て上げる人生を歩んでいきましょう。